出 生 の 秘 密

椎名利（化工会）

（一）

三〇メーターほどの高さはあるだろうか、上部が丸みを帯びたタンクが並ぶ一帯を抜けると、四、五〇メートルの高さの反応塔が林立する地域に至る。東西・南北に整然と区画された工場は、道の両側にトラス状に組まれた、頑丈なパイプラックの上を走る数十本の大小のパイプで繋がれ、設備として有機的な機能を発揮する。

仮に、この大小の配管を、東京駅を起点に繋ぐと楽に福岡まで届くだろう。

時々蒸気配管から、復水した水を抜くために取り付けられているトラップが、蒸気を噴く音を響かせている。

優に一〇万坪はある工場内の移動は自転車を使う。名木も自転車を走らせていた。五月の初めとは言え、十分も走るとヘルメットの下にうっすらと汗がにじむ。

工場の外れにあるパイロットプラント地域から、研究所の本館までは優に二十分は要した。

部屋に戻りタバコを一服しながら、今から行われる第十五研究室との打合わせを考えると、少々憂鬱になった。

中央研究所は、基礎、開発の二つの機能に大きく分けられ、名木の属する開発研究所はプロセス開発担当の第十研究室を始め、十二に分化されていた。

第十二研究室、通称松平研は、設備の材料選定を受け持つ部署だった。

現代の化学工業は、複雑で種々な専門的知識を要し、各研究室間の綿密な連携は欠かせなかった。特に塩酸・硫酸など普通の材料ではすぐ穴が空いてしまう化学品を、高温・高圧などの過酷な条件下で扱わねばならぬ化学工業にとって、材料選定はそのプロジェクトの死命を制した。

いかに優れた製造のアイディアでも、その反応環境に耐えうる材料が見つからないことには、コマーシャル化は覚つかない。このような重要な打合わせを、名木のごとき入社二年目の若輩に任せるには理由があった。

今日も一階の松平研に降りて行くと、隣接する部長室から、いらだった部

長の声が聞こえてきた。松平室長が怒られているに決まっている。

元子爵の三男だといわれている彼の話し方は、間延びしていて、誰でもいらいらさせられる。

今も状況を容易に想像できる。こんな様子に違いない。

書類を手にした松平が、部長の前に直立不動の姿勢をとると、部長は老眼鏡を外し、

「結果はどうかね」と問いかけた。

「ええ……、これをお読みいただきたいのですが……」

彼は、かなり分厚い研究報告書を部長の前に置き、少し言い淀む例の口調で話し始めた。

報告書を手にしてぱらぱらとめくった部長は、

「お前は重さで勝負するのか。馬鹿者。報告書は質の問題だ。分厚ければいいというわけではない。結果は……」とせき立てた。

元陸軍燃料廠の技術将校だった彼は、雷親父で有名だった。仕事の内容は勿論、報告書の書き方・説明の仕方まで文句をいう。時には、殴られるかと思うほどの怒り方をする。管理職も平もお構いなしだ。

松平は、緊張するとなお言葉に詰まる。

「あの……、三つのテストピースの内、一つが……」

どもり気味の言葉は、語尾が不明瞭で聞き取りにくい。

「要するに……、その……、一つにはピッテングと思われる……現象が……見られ……」

部長は、小柄な体を反らし気味に片腕を椅子の背に掛けると、不機嫌さも露わに、

「いいのか悪いのか、結論を先に言え！」

顔を真っ赤にして怒り始めた。

松平はいっそうあわてて、

「つまり……、その……う……」と言いかけると、

「『あ……』とか『う……』とかいうな。結論は！」

とうとう雷が落ちた。

彼の話し方は、元々語尾が不明確で、言葉が聞き取りにくかった。加えてやたらと接続詞や感嘆詞が入るため、聞いているのがもどかしい。そのため部長に

「お前は、先ずは話し方教室にでも行って、話し方の勉強をしてこい」とせかされ、真面目な彼はすぐ落語を習い始めたのだそうだ。

しかし、仕事の場では、その効果は未だ発揮されていなかった。

やがて、面長のやや口元が飛び出した風貌の松平が、部長室から出てきて自席でせかせかとタバコに火を付けた。

彼は、地方大学の助手をしていたが、部長に望まれて入社したのだという。

会議は、数名の他室からの出席者を加え、彼の主宰で進められた。厚いレンズの底から細い目をしばたたせると、担当の遠藤に報告を促した。

先ず、今回なぜチタンやハステロイCなどの材料が選ばれたかが述べられ、実験方法の詳細な説明がなされた。

通常テストは、板厚二、三ミリの材料を、各々直径三～四センチ程度の円形のピースに切取り――テストピースと呼ばれているが――、小数点以下三桁の精度で測られ、想定される条件下の反応液に吊される。このテストピースは、その化学薬品に侵されれば、当然溶けるので――腐食といわれる現象だが――重量が減少する。その減り方を測定し年間の腐食量を推定する。しかし、選定された材料は、元々耐えられそうなものが選ばれているので、減少量は微々たるもので、数ヶ月・一年と長い期間にわたってそのわずかな差と材料表面の微細な変化の観察を続けねばならない。実に根気のいる地味な仕事だ。

分厚い報告書には、丁寧にも専門家以外には判らないテストピースの顕微鏡写真まで貼付けられていた。

この材料選定は、化学プラントの建設に不可欠なものの、なんら理論らしきものはなく、事実だけが全てだった。そのため結果は重視されるものの、おおよそ研究的な面白味に欠けるため皆に敬遠されていた。

担当者の長々とした実験経過の説明の間に、彼の解説が入るからなおややこしい。

「うん……。今の話を要約すると……、つまり……その絶対ということは言えないが、……経済性は無視できんし……、まあ……やむなしというところ

かな」

　また、彼はいつも日陰になりがちな担当者をかばうためか、遠藤に、

「君、このＺプロジェクトは、君の材質選定いかんにかかっている」と、ハッパをかけるふりをして、自分の研究室の役割宣伝もしっかりやっていた。

　この遠藤と名木は、よく飲みに出掛ける間柄だった。

　名木より三年先輩の彼は、入社以来この松平研でおおよそ研究とはほど遠いこの材料テストを担当させられ、飽き飽きしていた。が、本来おとなしい性格なので、松平の信頼はことのほか厚く、頼られると移籍の話も言出せずにいる。そのため、名木は彼の不平のはけ口だった。

　今夜もいつもの不満を並べると幾分気が安らいだのか、

「松平室長、旧制金沢高校では文科、フランス文学志望でアンドレ・ジッドに心酔していたらしい」

　遠藤によると、現在の奥さんと婚約するに当たり、化学品の製造で財をなした彼女の実家の要望で仕方なく、大学は理科に変更したのだという。

「まあ貧乏華族が、彼女の財産を当てにせざるを得なかったのだろうが、そのくせ実家のＴ薬品に行かずに、Ｐ化成への入社が彼の唯一の意地さ。もっとも、それ相応な援助は得ているようだがね」

　噂によると、よく部下を誘っては飲みに行くらしく、その金離れの良さは皆の評価するところだったが、間延びした話し方と仕事しか話題にしない、彼との会話を歓迎するものは少なかった。

「松平室長のジッド論、聞いてみたいものですね」と名木がいうと、

「実は、Ｙ主任研究員が、彼の『出生の秘密』という話をぜひ聞いてみろというのだよ。普段彼の話し方、間延びして聞き難いだろう。それがさ、適当にお酒が入ると、ほら、落語の練習に通っていると言っていたろう。実に流暢に語るのだそうだ。よどみなく。でもこの酔いかたが難しい。自分の理性が適当に酒で覆われる、いわゆるほろ酔い状態でなければ駄目さ。でも、酒に強い彼のほろ酔い機嫌なんて見た覚えもない。いつまでも平然と飲んでいて、酔うとなると急にダウンしてしまう」

　その彼の話を要約すると、次のようだった。

　松平家の三男として彼が生まれた時、父親の子爵はすでに還暦だった。母親は、三度目の奥方で二十四才の若さだ。そこから彼は、どうも親父の種で

はないのでは、との風説がたった。確かにそういわれるだけの火種があった。

当時、長男は、すでに三十半ばで親父に似てなかなか優男、結婚はしていたものの女癖は相当なものらしく、彼ではとの噂はなかなか説得力があったらしい。しかも、長男は彼が中学生のころには亡くなっているという。遠藤は、

「俺も聞いたことがないから、いつも機会を窺っているのだが」と、あまり信じていない風な話しぶりだった。

その後、注意していると、何人かの先輩がその話題を知っていたが、直接聞いた人はいないようだった。

名木は、松平の普段の行動・話し方から推定すると、誰かが巧みに作ったヨタ話と思い、すっかり忘れていた。

（二）

しかし、その機会は意外に早くやってきた。

その年の長い梅雨が終わった七月の末、名木に初めて出張の機会が訪れた。松平室長と共に四日市工場に行くことだった。どうせ名木ごとき若輩で事足りると考えているわけだから、大した仕事ではないに違いない。

当日、松平室長と遠藤を含む三人が近鉄四日市駅に着いた時は、すでに夕方だった。駅前に新しくできたホテルを横目に見ながら松平は、繁華街をまるでよく見知った街を歩くかに足早に歩いた。人混みのところでは、名木たちはつい遅れがちになる。十分ほど歩いたろうか、とある小さな神社を確認すると、右に折れ路地に入った。すでに街灯が灯っていた。

その街灯を二つほどたどると、黒塀に囲まれた料亭風の家屋があった。入口の庭は、狭いが植木は丁寧に刈り込まれ、そろった玉ジャリが敷かれた玄関までのアプローチには、赤御影の敷石が配されていた。やや人工的に感じるものの、この街中にこんな日本趣味の宿があるのかと名木は思った。やはり貴族趣味というべきか、などと思いながら玄関に入るとその意味がすぐ理解できた。

よく磨かれた玄関の板の間は、そろった木目をみせ黒く光っている。正面には、黒糸の甲冑が飾られていた。

三人が入口に立つと、出てきた若い女中は、挨拶もそこそこに奥に走り込み、代わって年寄りの女将が転げるように出てくると、

「まあまあ、お坊ちゃま。ようこそお越し下さいました」

女将は、まるで長年会っていなかった息子を迎えたお袋のように、しげしげと松平の顔を見つめた。

後で聞くと、彼の乳母だったのだそうだ。

夕食は、工場長差し回しの車に迎えられ、松坂牛で有名な店に案内された。こんな料理のご相伴に預かれるのなら、鞄持ちも悪くないと名木は思った。

「君たちのお陰で四日市工場も新技術の恩恵に浴せる」

さすがに工場長ともなると如才ない。

名木と遠藤は、二人の会話に時々当たり障りのない相槌を打っていた。

宿に戻った時は、まだ九時だった。相部屋の遠藤と風呂に入り部屋に戻ると、

「松平さんが、向こうのお部屋でお待ちですよ」と、若い女中に促されて部屋にはいると、

「やあ……、もう少し飲まんかね。工場長が一緒じゃ、その……、落ち着かんからな」

浴衣姿の室長は、用意させた酒を女将とすでに飲み始めていた。会話は彼の少年時代の話らしく、たまに二人で笑いこけている。

名木も遠藤と顔を見合わせながら飲んでいたが、女将が用事のため中座したので、やむなく松平に顔を向けた。彼は、湯上がりの頬をてかてかに光らせ、たまにお絞りを額に当てた。座椅子にもたれて体をよじるせいか、浴衣の前が大きく開いている。意外に立派な胸毛が色白の肌に黒々と見えた。大柄の彼が少し背を曲げて座っている格好は、白熊のようで愛嬌がある。今日の彼はいやに快活だった。話し手を失った矛先が二人に向かってきた。

「君たち、私はね……」

いつも語尾が不明瞭で聞き取りにくい声が、今夜はいやにはっきりとしている。そっと顔色を窺うといつもみせたことのない歯を覗かせてにんまりとした。

歯は、ヘビースモーカーらしく黒ずんでいる。盃の酒を一口で飲むと、盃を名木に差し出した。

「私はね、これでも……、悩み多い身なのさ。つまり……、今でも……、俺

は……、誰の子なのかと悩んでいる」

幾分しんみりとした顔をすると、盃を置いた。この一言に名木はびっくりした。やはりほんとだったのだと、遠藤に目配せする。

ついに、彼が語り始めた。

「綺麗な母だった。それで……、私を産んだ時が二十四才だったから、私の中学時代はまさに女盛り。だから……その、仲間からうらやましがられ『ほんとに親父の子？』とやっかみ半分の言葉を浴びせられ、傷つき悩んだものだ。彼女はブルジョアの男爵家の出身だった。子爵と男爵というと華族の階級からするとだね……、つまり、たった一階級ではないかと思うだろう、ところがこの差はそう……、素晴らしく大きいのだよ。そうか、先ず君たちに日本の華族制度を話さなくては……な」

松平は、自分で盃を満たすと一息に空けた。

「明治二年六月十七日、大政奉還が行われたこの日、華族階級なるものが作られた。これは政府が王政復興に協力させる目的で、江戸時代の支配階級の公卿・諸侯を再編成したもので、当時、公卿は百四十二家、諸侯は二百八十五家で合わせると実に四百二十七家、まあこれが華族第一号というわけだ」

彼は、研究者らしく数字で裏付けしている。

「それを層別すると、先ず公卿、これは元来上級の延臣たち、諸侯は江戸幕府に直接臣従した禄高一万石以上の武家だ。そういうとしっかりした基準があるように思われるが、中には相当胡散臭いのもある。何時の世にもある例だが準ずるという奴だ。その一番目は、付家老、次いで交代寄合と称される諸侯に準じる集団だ。石高は三千石以上一万石未満が原則だったから、諸侯とは格段の差がある。しかしだ。こんな連中の中にも、機を見るに敏な奴らがいた。官軍が江戸に攻め上る時、その食料の調達、輸送などに協力する。そのように新政府に取り入っておいて、石高を申請し直すのさ。わが松平家の石高は、なんと一万一石というのだから相当怪しいものさ」

自嘲気味の笑いを浮かべ、一人でうなずき満足げに再び話し出した。

「しかし、この第一号華族は、旧体制の特権階級だが、明治十七年華族令が公布され、つまり『公候伯子男』の叙爵が行われると、七十六家が新しく誕生した。これは、御一新以降の功労者に与えられたもので全て男爵だ。まあいわば、ブルジョア階級というわけだ」

すっかり饒舌になった彼は、徳利を持ち上げ軽く振り、もう少し持ってくるように遠藤に促した。

「このブルジョア階級だが、その精神はフランス革命に遡る。当時、貴族の美徳は、気前の良さにあった。豪奢な宴会、贅沢な調度品など金銭的な浪費だ。これに対して新興のブルジョアは、節約して貯めた元本を元手に利潤の拡大をはからねばならない。最小の努力で最大の効果を得ることこそ、彼たちの行動原理だ。その行動原理は、経済原則だけに留まらず社会的規範にも向けられる。つまり、その当時の貴族の色恋が対象とされた。彼らの淫靡な宮廷生活では、多大の精子の浪費が行われていたからな」

松平は、ぐい飲みを持ってこらせ並々と満たすと、こぼれそうな酒を少し舐めた。

「つまり、節約主義が生殖に無関係な性的行為は、慎むべきだという考え方になる。この発想がスペルマの節約主義に発展すると自慰罪悪論となった。もっとも、これは私の説だがね。へへへ……。この思想は、意外に根強よく十九世紀から二十世紀初頭まで続く。この思想が日本にもたらされたのは勿論明治維新後だが、悪いことに近代医学と共に入ってきたため、科学的に裏付されているかに思われた。私のお袋の実家はプロテスタント。お袋は、洗礼は受けてなかったが、俺に厳しくその罪悪を説いた。君たちも若い時、マスをかくと病気になるとか、頭が悪くなるということ、聞いた覚えがあるだろう」

いつの間にか彼の語り口から、あのどもるような調子は消えていたが、時々舌の回りがおかしくなっていた。

「この自……慰の悪習から子供たちを護るため、色々な手段が編み出された。例えば、ベッドの中間に仕切り板を設け、自分の性器に手が届かなくするとか、また実に一九一四年まで、自慰防止用のコルセットがパリで売られていたそうだ。これなどは陰茎が勃起すると、ブザーが鳴るというからお笑いだ」

（どこからこんな話になったのだろうか）と、思いながら名木が聞いると、室長は団扇を右手に持つと、落語家が扇を持つように膝に立てると、話を続けた。

「ジ……自慰といえば、この名手として名高いのがアンドレ・ジッドだよ。彼の作品『一粒の麦もし死なずば』は、いきなりテーブルの下でマスターベージョンする坊やの話から始まる。これは彼の告白でもあるのだがね。……『狭き門』の二つ年上の従姉アリサは、彼の妻マドレーヌがモデルだ。ジッドは、少年時代から尊敬し熱愛し続けてきたこの二つ年上の従姉と結ばれたわけだが、彼女はついに処女妻で終わった。……なぜかって……。ハハハ、彼は世俗的な常識に二重にも三重にも縛られていた。先ず、ブルジョア社会では、タブーとされている実の従姉と結婚している。それに……、彼はこの

従姉の中に母親を見いだしていた」

彼は、珍しく大声で笑うと手にした盃の酒を、少し浴衣にこぼしたが気にもしない。

「つまり、妻と……セックスするのは母親を犯すこと、インセスト・ラブになるとの強迫観念が働いた。それに彼は過度の精神主義者だ。また、マドレーヌは夫が自分を性の対象としないのは、自分に何か魅力が欠けているのではと思う、慎み深さを持っていた。あまり自己反省心の強いのも考えものさ。ハハハ……。君、『狭き門』のアリサがどんな容姿か覚えているかい。覚えているはずがないさ。心理的にはあれだけ書き込んでいるにもかかわらず、彼女の外見の描写は全くないのだから。ジッドとて生身の人間だから、情熱のままぶつかり合ってしまえば終わりなのに……。それで、同性愛に走った彼は『コリドン』の中で猛烈な同性愛擁護論を展開する。そして、異性愛以外は不自然な行為だとする社会に、『何が自然な行為か』と問題提起する。大体生殖に関係ない性行為は不自然だとの発想の根底には、性は生殖のためにあるとの前提がある」

このころになると、三人ともかなり酔っぱらっていた。松平は、二つ折りの座布団に右肘を付き、頭を支えるような格好で横になっていた。

「生物の生殖形態には、無性生殖と有性生殖がある。繁殖の効率だけで考えれば、……無性生殖にかなわない。そうだろ、有性では雌しか子供を産めないから、……効率は半分だ。このように効率の悪い有性生殖の生物が進化してきたのは、別のわけがあるに違いない」

名木の朦朧とした意識の中を、意味不明な言葉が行き来していた。

（君達ね。……最近、少子化など子供を産みたがらない男女が増えているそうだが……。そんなことしていると……、神様が怒って……、人間を……無性……生殖に戻して……しまうかも。セックスの快楽は、神様が人間だけに与えてくれた、生殖の対価としてのご褒美なのだから……）

松平の声が夢の中から聞こえてきた。

（ところで、なぜこんな話になったのだろう……？『出生の秘密』は……）などの疑問が湧くのだが……。

その半睡状態の意識を、突然、女の声が破った。

「あらあら、お坊ちゃま、そんな格好でうたたね寝されては、お風邪を召しますわよ」

（2009-12-9）改